

「命の大切さ」を実感させる教育プログラム策定委員会に係る 第1回「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会 まとめ

【協議】

1 「命の大切さ」を実感させる教育の現状と課題

(1) 子どもたちにとって「命」とは何か。

ア 命を実感しにくい子どもたち

相手のことを全く考えず、自分だけの狭い世界を作ってその中で楽しんでいる、そういう子どもたちが最近出現している。

子どもにとって「命」とは何であるかを考える際に、IT社会の中で、バーチャルとアクチュアルの混同という問題があり、注意を払いたい。

バーチャルな世界の影響を受けているのか、命を実感できない子どもたちが出てきている。今回のJR宝塚線の事故に追隨して、置石をした子どもが「電車の転ぶところを見たかった」というのと、以前子どもが人を殺して「人が死んだらどうなるか見てみたかった」という事件は似ている。

イ 親世代の変化

幼稚園の先生方の話によると、親たちの命に対する認識も変わってきている。体験の欠落という点は、親の世代も子どもたちと同じようなものなのだろう。

ひとつは親の世代の問題ではないかということである。今子どもを育てている20代、30代の親の世代にとっても戦争や感染症などによって近親者が亡くなるといった死に触れる機会は少なく、死は身近なものではない。子どもたちに生きるということや命について心に響かせるためには、親の世代への取組が必要である。

ウ 死の体験を取り除く現代社会

最近の子どもの中には命をゲーム的感覚でとらえている子がいる。核家族化の進展によって、祖父母の死に直接触れて家族皆で悲しんだり、あるいは命の誕生の喜びを家族皆で共にするなどという命を実感として捉える場が少なくなってきた。

昔は日常生活の中で家での出産や親族の死などに触れる機会が多かったが、今はたいてい病院で出産したり、死を迎えたりする。病院で死を迎えた場合、かわいがってくれた親しい人がどうなっていったかを見ることなく、お骨になって帰ってくる。その間の体験が取り去られているのである。

死は誰しも避けようとするしんどいテーマである。戦後60年の平和な生活の中で死を実感することが少なくなり、無意識的に死を遠ざけた生活をしている。テレビに代表されるように面白おかしい世界に社会は有頂天になり、死はバーチャルに非現実的なものとして軽々しく扱われている現実がある。

「実感させる」というのは非常に難しい。平和を教えるために戦争の悲惨さを扱うように、「命の大切さ」を教えるには「死」のもっている様々な側面、例えば遺族の悲嘆や苦しみを伝えたり、「死」を美化せず、ある意味きたないものだという事も伝えなければならず、

それが教育現場で扱う範囲のものであるかどうかも含めて難しい。

(2) 子どもたちに「命の大切さ」を実感させるためには

ア 自分を大切に思う気持ち

多くの学生が「自分は愛されている」と感じる事が少ないという。また、友達はあるが親友はいないと大学生はよく言う。本当にしんどいことを言える友達もいないし、親にも話せない。自分が大切（愛されていて尊い存在）と思えなかったら、人のことや命は大切とは思えない。

イ 家族愛

自殺未遂を繰り返す女子中学生が「私はお母さんがいなかったらとっくに死んでいた」と話すのを聞いたことがある。家族のお互いの愛情がしっかりとしていることが命を大切に思う基盤であり、それが生きる喜びにつながり、命の大切さの実感につながるのではないだろうか。

ウ 「老い」「死」「苦しみ」と実際に関わる体験

苦しんだ経験をした方の話を聴いたり、今苦しんでいる人と実際に自分が関わってみることによって「人が生きるということはしんどいこともあるけれど、うれしいこともあるんだ」と感じ取ることで、他人事になることを防ぐ。

施設や一人暮らしのお年寄りを、子どもたちが世話をする体験をとおして、今まで隠されてしまっていた「老い」や「死」を体験的に実感できる。

ため池事故によって、子どもたちは命に目覚め、命は取り返しがつかないものであるということ、友達の死という悲しみを通して学んだ。大人たちも事故を契機に、学校と地域が協力し安全マップを作るなど命を守るための安全対策に取り組み始めた。学校教育だけでは命の問題には取り組めない。

エ 学校・家庭・地域が共に取り組む

心の教育総合センターで今まで取り組んできた問題や大阪池田の事件などの経験を踏まえると、命の大切さを実感させることは教育現場だけでできる問題ではない。

2 「命の大切さ」をどう実感させるか（教育プログラムの開発に向けて）

(1) 「命の大切さ」を実感させる教育の在り方について

ア 愛情から実感する

日常の家族のかかわりの中で自分一人の命ではないという思いをもつ、これが家族愛であり、結果的にはこの家族愛が命を実感することにつながるのではないか。

イ 喜びから実感する

今は真綿で包むので本当の愛情も感じられず、かといって本気で叱られたこともなく、生の触れ合いが薄れた時代である。マズローのいう至高体験、「あっ！」という感嘆詞しかない瞬間が今の子どもにはない。「真綿」を突き破って、すごい！と思うこと、感動体験をどうしたら与えられるのかを考える必要がある。

本来は学校でも家庭でも、友達との付き合いのなかでもこの「至高体験」があってしかるべきである。ベンジャミン・ブルームの「学習活動における至高体験」という論文の中でいう「やった、わかった!」という達成感や成就感・自己有能感を、「生きる喜び」を実感させる教育の中で生かせないかと思う。

「生きる喜び」は「死の問題」、「誕生・赤ちゃん」(親からの聞き取り等)などから入るアプローチと、日常性の殻をぶち破った体の内側からのうち震えによって実感する至高体験をとおしてのアプローチとがある。

大学生に中学校時代の思い出を聞くと、修学旅行や文化祭などの学校行事を挙げることが多い。クラスがまとまってやったことが一番の感動体験になっている。魂に響くような、生きる喜びにつながるような感動(頭で感じる感動ではなく心の底からの感動)を子ども達に学校生活で体験させられないものかと思う。

「できた!」という喜び(至高体験)、味覚・臭覚などの五感の喜び、音楽や読書などの没頭体験など人生の彩りを強く感じることができる体験が必要である。

ウ 大切なものを喪失することから実感する

命の大切さを実感させる教育を考えるための方向性として、生きているこの命が大切だという考え方と、大切なものや人を失うことによって、命の大切さを実感するという考え方がある。

「自分がここにいるということはどういうことか」に気づかせるワークショップを行っている。それは日常生活の中で、今生きているという存在感を確認する作業を行わせるのである。「もし自分が死んだら家族や友達はどう思うか」と失う側から考えてみる。

20代で死ぬかもしれないという病気にかかり、自分が死んでいくと思った時に、「何の為に生きてきたのか」「自分は人の為に何をしたか」などと思った。本当の自分というものに向かい合ってみる必要があると思う。

エ 疑似体験をとおして実感する

「自分自身が死んでいく」というワークショップをすると、どんなに周りに生かされているか、多くの支えを感じて、一生懸命に生きようと思うようになる。このワークショップの最後にどんな言葉を残したいですかと聞くと、たいいていの子が「ありがとう」と言う。疑似体験でもいいから、自分の人生を振り返る機会を持つことも必要ではないか。

オ 家庭・学校・地域の中の信頼関係から実感する

義家さん(ヤンキー先生)は講演で、自分自身が変わることができたのは、担任教師の心からの限りない愛情の力によると話した。命の基本は限りない愛であり、それがあって初めて命を大切に出来る。この基本的な信頼関係を、家庭の中で教師と子どもの中で地域のなかで、どう培っていくのか見直していく営みを続けていくことが必要だ。

カ 教師・大人自身が命の大切さを実感することの重要性

今回のプログラムでは教師自身が命の大切さをどこまで実感しているのかが大事である。場合によっては、教師の研修も必要である。

「命」「生きる」「死ぬ」に関わろうとすると、自分自身の価値観を問われる。自分自身

の命の捉え方や死生観・人間観を持っていないと、死に直面して苦しんでいる人や悩んでいる人に会っても逃げるしかない。苦しんでいる人に対して何かができるとすれば、苦しんでいる人の「気持ちを汲む」ということ、いわゆる「共感」である。

母親が変わってきたと言うが、若い教師の感覚も変わってきているという実感を持っている。教師は子ども達の学習環境として非常に大事な位置にいる。

キ 発達段階に応じて準備する

死は身近にあるものではないが、命を死と裏腹なものとして考えていくのがひとつの近道である。先日母が亡くなった時、幼い孫は「今しか触れないんだよ」と言って遺体に珍しそうに触れていたが、小学校高学年の孫たちは静かに見ている。

人生を彩る体験は、子どもたちがそれぞれの発達段階に応じて準備された形で体験していくことが大事である。そして体験したものを、子どもたちが振り返り、自分で味わいを深めていく。

ク 命に対する認識

命を、ただ単に「生かされている」ではなくて、「私において何かもっと大きなものが生きている」と実感するようになると、命を大切にしましょうと特別に言わなくても、おのずから全てのものに通底するものを感じるようになる。

宗教教育（宗派教育ではない）をいろんなチャンスに言ってきたが、私においてある大きな力が働いている。だから命というのも実はそのひとつの現れであり、だからこそかけがえがない。（聖書の）ヨブ記のように、うまくいく時ばかりが人生ではない、どんなにどん底にある時でも、命を与えられているということ自体に対する感謝の思いを実感できるか。それが宗教的な深まりだと思う。

(2) プログラム構想に向けて

ア セルフ・エスティーム（自尊感情）を高める

自分をほめる、相手をほめるということを学んでいけるセルフ・エスティームを学校の中で高めるようなプログラムを考えることが必要ではないか。

子どもだけでなく親も認めて欲しい、ほめて欲しい気持ちをもっている。「よくやったね」という言葉がほしいと思っている。

人権教育のプログラムにも入っている自尊感情を高めるということは、非常に大事なことである。

イ 子どもたちの想像力・共感性を育てる

子どもに対しても周囲の親に対しても生と死の間にある暴力や犯罪の被害を受けるとは、どういうことをきちんと教える必要がある。暴力被害を受けた人、災害被害を受けた人の体験を聞くということは、非常に大切なことではないかと思う。

いじめによる自殺で息子を亡くした父親が学校へ行って話をするという取組が長野県にある。説得力があり子どもたちも感動したということだ。プログラムの中で実感を伝えるための一つの授業形態であると思う。

中身をぬいた卵を本当の子どものように育てるワークショップ（子育ての疑似体験）をと

おして、自分が守ってあげないと生きていけない存在があることや自分も親にそうやって育てられてきたんだということに気付く。最後には「大事にしている卵を誰かが床に投げつけたらどんな気持ちにする？」と聞かれると、突然大切にしている存在を奪われることの辛さや怒りに共感できるようになる。

想像力は小さなことで育てることができる。ビデオを観るとか、病気の人や事故の被害者や遺族の方の話を聴くとかといった魂を揺さぶられるようなしかけを作ることで、感性は育っていく。

ウ 体験を深めさせる

いろんな体験活動が考えられる。例えば、卵というひとつの命の誕生につき合わせる。トライやる・ウィークでも行われているが、保育園で小さな子どもたちの世話をする。発達段階にもよるが、病院やターミナル・ケアの現場とかでの体験も有効かもしれない。教育の中で大切なのは感性豊かな子どもの時に、理論だけでなく自分で行動する体験をし、その体験と教師がもっている理論とを結び付けていくことであり、そのためのしかけが必要である。

エ 教師自身が「命」を実感する

学校の先生方に被害者や遺族の話を聴く機会を提供するのはひとつの方法である。子どもたちの心に響いていくためには、教える教師自身が実感をもつ必要がある。

こころのケアセンターで行う研修の中で、心のケアや虐待をテーマに取り上げた研修は人気が高く、研修参加者が一番心を打たれるのは被害者や遺族の話を聴く経験である。被害者やご遺族の話を聞くことで、本当に実感され、その後の研修を熱心に受けられる。

オ 家族との共同作業をとおして

命の大切さを実感させるためには、子どもが父母とともに取組んでいけるような共同作業的な仕掛けが必要である。

あまり長く生きてなくても子どもはいろんな体験をしており、例えば転校や病気などいろんな出来事の一つ一つに、親と一緒に意味付けをすることで、一つ一つのことに意味があるという見方ができるようになる。

子どもの誕生日に、親への聞き取りだけでなく、親子で学習する。例えば親が目の前で「どれだけあなたの誕生をみんなが待ったか」「どれだけあなたの誕生がうれしかったか」などを伝えることにより、命の大切さを共感できる授業がある。

【まとめ】

「かけがえのない命」、「命のつながり」を考える際の入り口としては、以下の点が考えられる。

生まれるということ 死ぬということ 病・老いの問題 限りない愛情の中でおのずから感じられる命 心の底からの喜び

つまり、「生老病死」と「愛情」、「喜び」の入り口である。

子どもたちに最初は命を大事にしましょう等と教えることも大事である。いろんな事例で解説

してあげる事も大事である。そしてそれぞれの子どもの生育史の中で体験したことを掘り起こして、吟味し、それらを実感に深めていく。その上で体験の場をつくって、日常生活で体験できないことを体験させて命の問題を実感できるようになる。あるいはその体験から自己内対話を深める。教育プログラムでは全部のことをカバーはできない。ある一連の活動の体験を、様々な切り口やレベルで実感できればいいのではないか。

大事なことは、子どもたちがそれぞれの発達段階に応じて準備された形で体験していくことである。そして体験したものを、子どもたちが振り返り、自分で味わいを深めていく。教育の中で小中高大学とうまく積み上がっていかないか。完璧なものは出来ないが、その一つのモデル的なものができるか。そうすればこの事業はとても意義深いものになると思う。